

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520515

研究課題名(和文) 京都府口丹波地方の方言敬語の動向

研究課題名(英文) The present situation of dialectal honorifics in the Kuchi-Tanba Area,

研究代表者

辻 加代子 (Tsuji, Kayoko)

神戸学院大学・経済学部・准教授

研究者番号：30514723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、京都語に隣接する京都府口丹波方言の敬語展開の現状を明らかにすることを旨としたものである。口丹波地方では、従来、尊敬語として機能するハル敬語と、親愛語として働くテヤ敬語とが併存し、使い分けられていた。しかし、2012年から2015年までの現地調査の結果、京都市に近い南東部、特に中心部の亀岡地区で、テヤ敬語が廃れつつあることがわかった。そして女性は京都市女性話者に近い敬語運用を行い、男性は京阪地方で盛んな軽卑語のヨルを取り入れ、テヤ敬語の役割の一部を担わせつつある。

また、ほぼ全域で、存在動詞がハルに承接する場合、オラハルとイハルないしイヤハルとのあいだでゆれがみられることがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to examine the present situation of dialectal honorifics in the Kuchi-Tanba Area, contiguous to Kyoto-city. In the Kuchi-Tanba Area the honorific form -haru(haru-keigo) which functions as a respectful honorifics and the honorific form -teya (teya-keigo) which shows affection have been used for each situations. However, the teya-keigo is falling out of use in south-western area, especially in Kameoka district, the heart of the city. Accordingly, women are using haru-keigo exclusively and adopting such honorific usage as women of Kyoto city. On the otherhand men are adopting yoru which denotes slight vulgar or affective nuance and partly bearing the same function of teya-keigo.

And also it is clarified that there is a shift from oraharu (a combination of existential verb oru and haru) to iharu (a combination of existential verb iru and haru) almost everywhere in this area.

研究分野：日本語学

キーワード：方言 敬語 方言敬語 ハル敬語 テヤ敬語 京都府口丹波地方 第三者敬語

1. 研究開始当初の背景

(1)現代日本語の敬語の一般的動向として、第三者(対話の場に居合わせない話題の人物)に対する敬語使用に関して、素材敬語の対者敬語の使用という現象が指摘されている(井上史雄 1981「敬語の地理学」『國文學解釈と教材の研究 1月臨時増刊号 敬語の手帖』26-2, 39-47. 学燈社)。一方、近畿中央部方言の敬語に関しては、上記とは異なる、話し相手として待遇する場合よりも、第三者として話題にする場合に素材待遇語を多用するという現象が指摘されている(宮治弘明 1987「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151, 38-56)。上のような現象に関して、京都府亀岡市を中心とする口丹波地方の敬語運用上の特質についての詳細な報告はない。近畿中央部方言の一角をなす京都市方言の敬語に関しては後者の現象(話し相手として待遇する場合よりも、第三者として話題にする場合での素材待遇語の多用)が確認されているが、その京都市に隣接する口丹波地方ではどうであろうか。

(2)口丹波地方の敬語については、奥村(1962)に「口丹波には、れっきとした敬語書カハル形が存しており、書イテヤ形は、むしろ、親愛語となっている。つまり先生が書カハッタ～兄チャンが書イチャッタ、という様な使い分けが存するのである」と記されている。しかし、筆者が最近亀岡市中心部(旧町)の亀岡地区で調査した話者はハル敬語(「行かハル」「書かハル」のような形式)だけを使用し、テヤ敬語(動詞テ形に指定辞がついた「行ってヤ」「書いてヤ」のような形式)は使用しないとのことだった。口丹波地方でハル敬語に押されてテヤ敬語が廃れているとすれば、テヤ敬語とハル敬語の使い分けはどうなっているのか。もともとこの地方では存在動詞としてオルを使用する地域だったが、このオルに方言敬語は承接するのか。

2. 研究の目的

上記1に記した背景の中で、京都府口丹波地方(北桑田郡を除く)における方言敬語の展開の実情を、現地調査により明らかにすることが研究の目的である。具体的には、口丹波地方における、内部の地域差、主要地点における使用敬語形式と敬語運用の枠組み、を解明することを旨とする。

特に、近畿中央部方言で指摘されている上述の現象が当地でも認められるか、方言場面でハル敬語を専らに使用する地域ではハルはどのような機能を担っているのか、ハル敬語とテヤ敬語併用地域ではどのような使い分けが行われているか、について実証する。

3. 研究の方法

研究の方法は主に現地調査による。その調査方法としては、調査票による面接調査と

談話収録調査の二種類の方法によった。

調査票による面接調査に関しては、口丹波地方と隣接する京都市で、筆者が実施した調査文を参考に(これは、京都市、ひいては近畿中央部方言との共通点や相違点を確認するという意味合いもある)話し相手待遇、および、第三者待遇での敬語使用の実際、第三者敬語に関して、自然物敬語・所有者敬語・身内と親友への敬語・心内発話での敬語使用の有無・現場依存的な心的態度を表す敬語使用の有無等多様な観点から設問を考えた。

さらに、『新修亀岡市史』の報告を参考に存在動詞に敬語が付加された場合どうなるか(オラハッタ、オッチャッタのような言い方の確認)テヤ敬語を使用する場合その活用や承接はどうか、等の当地特有の方言敬語に関する設問を加えた。

また、動詞述語以外の名詞や副詞などの敬語的表現の使用実態を確かめる設問も加えた。

談話収録調査に関しては、基本的に、話者同士が親しく、丁寧語を使用しないような談話の収録を目ざした。これは、敬語体系全体の丁寧語化という全国的な傾向が当地に及んでいるかということの確認と、第三者敬語が使われている場合、どんな形式が使用され、どんな範囲まで使用されているか等の確認のためである。

4. 研究成果

(1)調査地、調査対象者等

以下に、それぞれの調査の調査地と調査対象者(話者)の属性(性別・世代)を記す。調査地は概略、京都市から近い所から遠い所へ、言い換えると、南東から北西への順で並べている。調査対象者(話者)のカッコ内は調査年である。世代は調査時現在のものである。

《調査票による面接調査》

亀岡市篠町

70代男性(H27)・60代女性(H27)

亀岡市亀岡地区

70代女性(H24)亀岡市北古世町

60代男性(H24)亀岡市北古世町

60代女性(H24)亀岡市西町

30代男性(H26)亀岡市安町

30代女性(H26)亀岡市余部町出身安町在住

亀岡市曾我部町

70代男性(H25)・70代女性(H26)・60代男性(H26)

亀岡市千歳町

60代女性(H25)

亀岡市馬路町

70代男性(H25)・60代女性(H25)

40代男性(H25) 亀岡市河原林町出身(馬路町に隣接) 馬路町在住
30代女性(H25)

亀岡市千代川町

60代男性(H26)・50代女性(H26)・30代男性(H26)・30代女性(H26)

亀岡市東本梅町

70代男性(H26)・70代女性(H26)・40代女性(H26)

南丹市園部町

70代女性(H25)・70代男性(H25)・60代男性(H25)・60代女性(H25)・30代男性(H25)・30代女性(H25)

《談話収録調査》

亀岡市亀岡地区〔談話1〕

調査地：亀岡市北古世町

談話参加者(話者属性)：2名(60代女性・西町出身在住[Ⓐ]と70代女性・北古世町出身在住[Ⓓ])

調査年：平成24年

亀岡市曾我部町〔談話2〕

調査地：亀岡市曾我部町

談話参加者(話者属性)：2名(両名とも70代女性・曾我部町出身在住[Ⓒ][Ⓔ])

調査年：平成27年

亀岡市東本梅町〔談話3〕

調査地：亀岡市東本梅町

談話参加者(話者属性)：3名(80代男性1名[Ⓔ]・70代男性2名[Ⓕ][Ⓖ]・全員とも東本梅町出身在住)

調査年：平成25年

南丹市園部町〔談話4〕

調査地：南丹市園部町

談話参加者(話者属性)：2名(両名とも60代女性・園部町出身在住[Ⓗ][Ⓙ])

調査年：平成25年

亀岡地区会議談話(参考)

調査地：亀岡市安町

談話参加者(話者属性)：7名(50代男性1名・60代男性1名・70代男性4名・80代男性1名)

調査年：平成26年

※[Ⓐ]～[Ⓙ]は話者IDとする。

(2)口丹波地方内部の地域差

ハル敬語を使用するという回答が全域でみられたのに対し、テヤ敬語を使用するという回答は、曾我部町、東本梅町、園部町の高年層のみであった。このうち東本梅町では女性には使用しないという回答だった。

軽卑語のヨルを使用するという回答が男性に多くの地域でみられた。

以下、形式別に使用実態の詳細を記す。

《ハル敬語》

全域で、話し相手待遇、および第三者待遇ともに活発に使用されている。

方言敬語(動詞述語)としてハルを専一的に使用していると回答した属性は篠町女性、亀岡地区女性、千歳町女性、千代川町女性、東本梅町女性、園部町60代男性と30代女性であった。

第三者に対する尊敬語(以下では第三者敬語と簡略に述べることもある)の使用は標準語の場合と比較しても格段に多いと言える。

京都市に近い篠町と馬路町の60代女性は無生物主語(豆・雨・ヒマワリ・太陽・電車)にもハルを用い、面識のない人を対象に、連帯修飾節内での敬語使用の有無を問う設問(調査文「隣に引っ越して来る人の名は知らない」の「引っ越して来る人」)でもハルを使用するという回答が大半を占めた。

口丹波地方は、もともと存在動詞でオルを用いる地方で、ハルが承接する場合、オラハルとなる地方であった。しかし、京都市に近い南東部を中心としてイハルとオラハルを併用する、という回答が多くなっている。

『新修亀岡市史 資料編第五巻』「方言」(1998: 839-896、中井幸比古執筆)の記述より、イハルの勢力が伸びていると考えられる。

以下に、談話の文字化データから、現代標準語や東日本を中心とする敬語運用では尊敬語を使用しないと考えられる文脈での使用例を記す。具体的に少し説明しておく。談話1～4はいずれも話し相手に丁寧語を使用しないくだけた談話であった。

まず、基本的に、「素材敬語の対者敬語的使用」ないし、「敬語体系全体の丁寧語化」をいう運用であれば、ハルのような尊敬語ないし素材敬語は使用されないはずである。

次に、大石初太郎(1979「脱待遇 敬語に関する一面」大塚国語国文学会編『国文学言語と文芸』88, 136-157、桜楓社)で、今日の言語生活においては、間柄の関係がない人物を対象にして脱待遇の扱いはあたりまえだとしている。下に示す発話例はこの点からも外れている。

[以下では、談話の発話例を示す際、発話末に必要な情報を、談話番号、話し手 話し相手【話題の主語】のように記す]

(1)遠くから みんな あんた 写真撮りに来てはるやんか。談話1、[Ⓐ]→[Ⓑ]【みんな】

(2)(市役所なんかでも)美術館みたいにしてはって、談話1、[Ⓑ]→[Ⓐ]【篠山市】

(3)そら みとらな あかんわ。……どんな人が いはる わからへんさかい。(Ⓒうん)田舎やさけ ゆうて。(Ⓒうん)ほつといたら。談話2、[Ⓓ]→[Ⓒ]【どんな人】

(4) 関東 行かはる人が 多いんやてな。東京へ。談話 2、㉑→㉒【京都から関東へ行く人】

(5) みんな あんな 上 登ったりして ((㉓ そう そう そう) 遊んでほはる。(㉔ うん) あんた プランコやら なんやして みんな 遊んだほはる。談話 2、㉑→㉒【学童保育の子みんな】

(6) あれ 地元の人で みんな しはったんか。談話 3、㉕ ㉖㉗【地元の人みんな】

(7) 今年は どころも あれ つるし (= つるし柿) を (猿に) とられはったみたいやな うーん。談話 4、㉑→㉒【どこの家でも】

(8) そやけど それも もう だんだん その 若い 人が おらへんし 年寄り ばっかに なってたり 女の人が おらはらへん なったりしたら もう 宿が できんやん。談話 4、㉓→㉔【(集落の) 女の人 仮定条件節内】

《テヤ敬語》

テヤ敬語は篠町男性、亀岡地区 30 代男性、曾我部町 70 代男性と女性、馬路町 60 代女性、東本梅町 70 代男性、園部町 70 代男性と 60 代女性であった。このうち、篠町男性、亀岡地区 30 代男性、曾我部町 70 代男性は現場依存的な文脈で 1、2 例でのみ使用するという回答であり、馬路町 60 代女性は甥・姪を話題に家族や友人を話し相手にするときだけ使用するという回答であって、東南部でのテヤ敬語の衰退がうかがわれる。

他方、北西部の東本梅町や園部町の高年層、曾我部町の高年層女性は話し相手待遇でもテヤ敬語を使用している状況である。

以下に、談話文字化データから、話し相手待遇での使用例(例文(9)(10))と、第三者待遇での使用での使用例(例文(11)~(13))を示す。

(9) ほんで あっちゃん 知っとってやろ? 談話 2、㉓→㉔

(10) ちゃう これは そ そ あんたが 知っとってんわ 談話 3、㉕ ㉖

(11) で その子 ひとり 遊んどってか。談話 2、㉑→㉒【㉑の孫】

(12) で 私より 1 年下の子は 1 年だけ新しい 中学校 行っちゃったんや。談話 4、㉓→㉔【同じ中学で 1 年下級生の生徒全員】

(13) (社会人として若い子が自分の集落に) ほんまに おっちゃんい。談話 4、㉓→㉔【社会人として若い子 部分否定】

ハルが知り合いの人はもとより、不特定の対象にも広く使われるのに対し、テヤ敬語は親しい友人や知り合い(年下の人や子どもにも適用可)に適用されていることが多い。ただし、不特定多数への適用例や、部分否定の文脈での適用例も認められる。

曾我部町で収録した談話 2 には、同じ小学校同窓生を話題にしても、基本的にはハル敬語を使用するが、親しい友人にはテヤ敬語を使用するという使い分けがみられる。

園部町など北西部では、存在動詞オルが根付いており、「ある」「おった」「~とった(~していた)」「なってきたる・なってきたおる(なってきた)」はもとより、標準語で「(高齢者世帯に) なっている」のところは「(高齢者世帯に) なりよる」のように言う。したがって、存在動詞にハルがつくとオラハルのように、テヤがつくとオツテヤ、オツチャッタ(過去)、オツチャナイ(現在・否定)のようになるのが普通のようなのである。「いる」にオルがついたイテヤ・イチャッタのような形は認められなかった。ただし、園部町の 30 代を含めて口丹波全域で、ハル敬語を用いる場合には、オラハルとイハルとの間のゆれが認められた。

(3) 主要地点における使用敬語形式と敬語運用の枠組み

《亀岡地区》

筆者は京都語の敬語について現地調査を行い、京都市の女性はハル敬語をくだけた場面でも第三者敬語として多用し、その適用範囲が下位の対象にも及び、さらには三人称の広い範囲に及んでいることを指摘した(辻加代子 2009『ハル敬語考 京都語の社会言語史』ひつじ書房)。当地区の女性話者も基本的にハル敬語だけを用い、(オラハルの言い方がいくらか残っていることを除けば)京都語と類似の使い方をしていることが確かめられた。

また、当地区をはじめ他の地点でも、下向き待遇や、マイナス評価や悪感情を表示する機能を担わせてヨルを使用している男性話者が多く認められる。

これらの現象は、近年、当地方、特に亀岡地区を中心とする東南部の方言敬語が形式面でも運用面でも京都語の敬語に近づいていることの表れであると解釈できる。

《曾我部町男性》

男性話者はヨルを使うようになっており、かつてテヤ敬語を用いた文脈でヨルに置き換わっているようである。その中でテヤ敬語が回答された文脈が現場依存的な心的態度を表す用法にわずかにあったので、下に示す。70 代男性「(家族の誰かが) 底なしに飲んでや」「可哀想に、あの子はぐれちゃったんやろか」

60 代男性「うちの子いくらでも食べる」というが、同じ文脈で母親だったら「食べてや」という。

この結果からは、ヨルとテヤ敬語とのわずかなニュアンスの違いがわかる。

《曾我部町女性・東本梅町・南丹市園部町》
テヤ敬語がある程度保持されている属性である。

少し距離を置く対象や不特定の抽象的な存在にハル敬語を用い、心理的に近い存在にはテヤ敬語を用いる。

《身内尊敬用法》

面接調査では親族と親友を話題にした場合について、対家族・対親友・対先生という三つの場面を設定して調査した。

結果的には、対先生場面では、尊敬語を使用するという回答は近親者を話題にする場合は少なかった。義理の「上」の関係になると多くなった。次は談話文字化データに現れた該当例である。テヤ敬語は「下」の関係にある場合でも現れている。

(14) うん 勤めとってや。 談話 2、◎→⑩
【息子の嫁】

(15) んー あんまり しはらへん。うん もう めんどくさがらはる ようになつた... 談話 4、◎→⑩【母親】

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

研究代表者が 2015 年度 9 月にクモ膜下出血を起こし、入院手術後安静、長期の療養を必要としたため、十分なまとめの作業を行ったり発表活動を行ったりすることができなかった。今後、体力の回復をまって研究成果の公表を心がけたい。

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻 加代子 (TSUJI, Kayoko)

神戸学院大学・経済学部・准教授

研究者番号：30514723

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：